

精神疾患のある親と暮らす学齢期の子どもを支えるための 養護教諭等対象ワークショップの効果評価

○長沼葉月¹⁾、土田幸子^{2,3)}、牛場裕治^{3,4)}、上原美子⁵⁾、北野陽子⁶⁾、吉岡幸子⁷⁾
 (1)首都大学東京、2)鈴鹿医療科学大学、3)親&子どものサポートを考える会、
 4)総合心療センターひなが、5)埼玉県立大学、6)ぷるすあるは、7)帝京科学大学)

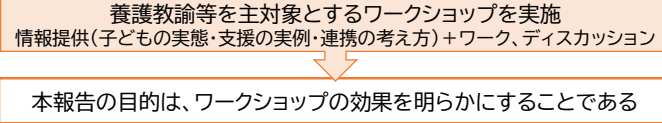
キーワード: 家族支援、チーム学校、効果評価



【研究の背景と目的】

精神疾患を抱えながら子育てをする親と子どもへの支援の必要性

- 就学前
- 主たる関与機関が市町村内の母子保健+児童福祉。連携が進む。保育所利用等で状態が安定すると、要支援ケースとしては終結することも
- 就学後
- 主たる関与機関は学校+児童福祉に。学校だけでは家族状況の把握が困難で、福祉サービスの情報も乏しいため支援に悩む



【方法】

ワークショップ: 2018年8月9日実施、68名参加
 無記名自己記入式質問紙による調査
 ※本報告はワークショップ前・後調査に基づく報告
 首都大学東京の研究安全倫理審査委員会の承認済

ワークショップ前調査(N=62)

ワークショップ後調査(N=62)

ワークショップ3カ月後調査

基本属性、職種、学校教職員としての経験年数、支援に関する対処可能感項目

満足度評価、各プログラム内容への評価、支援に関する対処可能感項目

【結果】

- ワークショップ参加者: 小学校23名(37.1%)、中学校19名(30.6%)、その他18名(29.0%)
- 職種: 養護教諭47名(75.8%)、スクールソーシャルワーカー4名やスクールカウンセラー3名等
- 年代: 20歳代19名(30.6%)、30歳代9名(14.5%)、40歳代12名(19.4%)、50歳代18名(29.0%)、60歳代3名(4.8%)
- 経験年数: 平均14.0年、標準偏差13.5年、1年から39年と若年層だけでなくベテラン層まで
- 研修の質に対する評価や、全体的な満足度は高かったが「どの程度ニーズを満たしたか」で不満が4名、「時間や量に満足していますか」で不満が3名みられ、後者は「もっと長い時間で」と希望あり



WSでの絵本の読み合わせワーク

図1 プログラム別評価

■とても役立つ ■役立つ ■役立たなかった

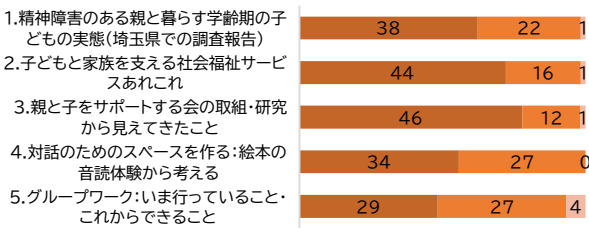


図1の「3」は具体的な家族理解や多機関連携のための事例検討の方法が、「2」は具体的な福祉サービスリストの提示が評価された。全体を通じての自由記述では「その場しのぎ」というワークショップでのキーワードと「連携」の在り方について肯定的な感想が挙げられた。

対処可能感については、図2より対処不可能に関する「どう関わればよいか分からない」「理解するのが難しい」「どう対応したらよいか分からない」の項目で評価が改善し、図3より対処可能感に関する「粘り強く必要なコミュニケーションを図ることはできる」でも評価が改善していた。

【考察】

精神疾患のある親と暮らす学齢期の子どもを支えるには、情報が集約しやすい学校が要になるが、多機関と連携しながらのサポートが欠かせない。子どもへの支援に真摯に向き合おうとする学校の教職員に対して、連携の方法や視点、具体的な事例検討などを交えるワークショップを実施することで、「何もできないわけではない」「粘り強く関わることはできる」等の対処可能感の変化が生じることが示された。

図2 対処不可能感項目の平均値の変化

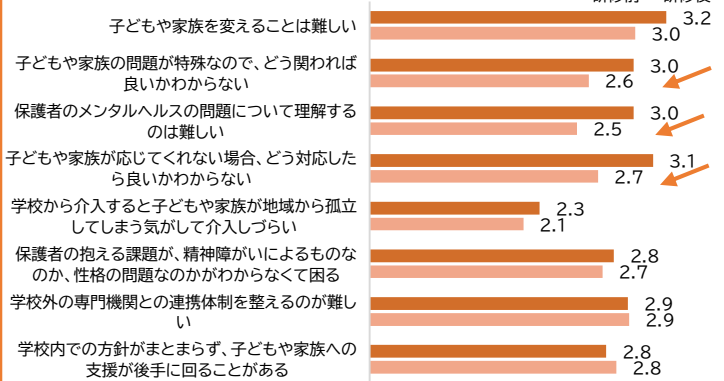


図3 対処可能感項目の平均値の変化

